

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏

名

MUYUNDA Martin Wamunyima

論文題目

Direct Agricultural Production Assets Transfer and Poverty
Upward Mobility in Rural Zambia: A Domestic Life Cycle
Perspective

ザンビア農村における農業生産資産の直接移転と貧困軽減：家
族ライフサイクルの視点から

論文審査担当者

主査

名古屋大学 教授 宇佐見晃一

委員 名古屋大学 教授 岡田 亜弥

委員 名古屋大学 准教授 山田 肖子

論文審査の結果の要旨

1. 本論文の構成と概要

ザンビア農村の貧困は慢性的かつ深刻な問題であり、ザンビア政府は様々な貧困軽減政策を実施してきた。従来の所得移転や農業投入財支援と比較して、最近の特徴ある政策の1つが農業普及事業の下で実施されている社会的援護の考えに基づく参加型手法による農業生産資産の直接移転である。この農業生産資産の直接移転という政策には、①より多くの世帯が貧困の罍から解放されて貧困軽減の軌道に移ること、②貧困軽減の持続化と加速化、に寄与できることが達成目標として期待されている。しかしながら、これらの目標は期待されたほど達成されていない。

この問題の背景にある理由の1つが貧困実態の把握にみられる正確の欠如であり、開発サービスを享受する個別世帯の認識や行動が家族ライフサイクルの中で変容するにもかかわらず、そのような質的違いと動的な視点を軽視することが一因である。

本論文は、次の具体的な課題を設定し、ザンビア西部の孤立地域で実施した農村世帯聞き取り調査（標本世帯：農業生産資産の直接移転プロジェクトを実施した5農村から75世帯、農業生産資産の直接移転プロジェクトを未だ実施していない5農村から75世帯。各世帯：世帯主と配偶者の2名）等に基づいた実証的分析を行っている。特に、家族ライフサイクルを3つの段階（再生産期：reproductive、中間期：intermediate、離散期：dispersion）に分け、分析の基軸としている。

- ① 住民の視点から、貧困を捉える枠組みを構築し、その枠組みを使って貧困実態を明らかにする。
- ② 農業生産資産の直接移転によって成し遂げられた貧困軽減の構造的特徴を明らかにする。
- ③ 農業生産資産の直接移転による貧困軽減の成否と方向性を規定する要因を明らかにし、貧困軽減の論理を考察する。

本論文は、貧困および貧困軽減という質的データを定量的に解析するために分散分析、クラスター分析、ロジスティック回帰分析、因子分析を採用している。

本論文は7つの章から構成されている。

第1章では問題意識、研究目的、研究の意義を説明し、既存研究の方法論や成果を3つの視点から整理して批判的に検討している。特に、これまでの貧困研究の成果の弱点を克服するためには、家族ライフサイクル、（従来の所得的貧困 *income poverty* ではなく）資産的貧困 *asset poverty* という視点が重要であることを説明している。

第2章では、研究の対象国であるザンビアの農村における貧困の実情、そして貧困軽減の為に実施されている政策を概説している。特に、本論文が扱う「農業生産資産の直接移転」政策の貧困軽減政策のなかでの立ち位置を明らかにし、その特徴である「参加型」と「社会的援護」の内容を説明している。

第3章では、データの収集と分析に係る方法、対象地域の農村の基本的特徴を概説している。特に、国際機関や研究者が提唱する非常に精密な概念及び装置を使うと立場を取らず、住民の視点から貧困を捉えるという立場から、参加型手法 *participatory profiling* を用いて、住民が貧困を捉えるために使う「8つの視点、4段階評価」という枠組みを構築した。あわせて、迅速農村調査

論文審査の結果の要旨

法 rapid rural appraisal を用いて、生計戦略の選択や直接移転された農業生産資産の効果的利用を規定すると住民が認知する 24 の要因を同定した。

第 4 章、第 5 章、第 6 章は本論文の核となる実証的研究の成果を論述する章である。第 4 章では、上述した住民が貧困を捉えるために使う「8つの視点、4段階評価」という枠組みを用いて、農業生産資産の直接移転政策が実施されていない 5 農村で収集した貧困データを分析した結果、①貧困認識の幅（視点の数）について家族ライフサイクルの段階間に差異はないけれど、炭水化物摂取、蛋白質摂取、畜力、所得という視点の貧困が高く認識され、配偶者間に差異がみられないこと、②衣料、炭水化物摂取、蛋白質摂取、畜力、所得の 5 視点において、貧困認識の深さは家族ライフサイクルと正の関係にあること、③貧困認識にみられる配偶者間の差異は認識が低い視点にみられ、家族ライフサイクルの中間期において女性の貧困認識が男性の貧困認識よりも比較的高いことが特徴的であること、が明らかになった。第 5 章では、本論文が取り扱う開発介入（即ち、農業生産資産の直接移転）による貧困軽減という効果について、この開発介入が実施された農村、実施されなかった農村でそれぞれ収集した住民の貧困認識を比較した結果、①認識として、貧困層全体が貧困軽減を享受できたが、貧困軽減が 8 つの視点に満遍なく発現していないこと、②貧困軽減の度合いは、貧困上位層では衣料と炭水化物摂取に偏り、貧困下位層では蛋白質摂取に偏っていること、③貧困上位層の家族ライフサイクルの離散期にある世帯において貧困軽減は比較的発現し難く、貧困下位層では家族ライフサイクルの再生産期にある世帯において貧困軽減の発現の幅が比較的狭いこと、が明らかになった。第 6 章では、農業生産資産の直接移転プロジェクトを実施した 5 農村の貧困上位層の世帯を対象を絞り、比較的幅広い貧困軽減を達成できた世帯の比較的多くが採択した生計多様化戦略は、家族ライフサイクルの各段階に共通する作物生産の拡張、再生産期と離散期に特徴的な預貯金、中間期に特徴的な流通業であることを明らかにした。さらに、分散分析、クラスター分析、ロジスティック回帰分析を駆使して、世帯が貧困軽減のために取り組む生計多様化戦略の選択を規定する要因を整理したうえで、預貯金を選択する再生産期と中間期の世帯、作物生産の拡張を選択する離散期の世帯という違いはみられるが、それらの選択を規定する要因には企業家精神と労働力賦存量への対応という特徴が共通していた。こうした世帯の規定要因、生計多様化戦略、効果として軽減される貧困の幅（視点の数と組み合わせ）に係るそれぞれの分析結果を関連付けて構造化することによって、農業生産資産の直接移転を契機に貧困の罍を突破できる世帯は、この直接移転を生計多様化に活かし、そこから生み出される経済余剰を消費ではなく投資に仕向ける世帯であることが明らかになった。言うまでもなく、貧困の罍を突破する道筋には、家族ライフサイクルの段階間で異なっていた。

第 7 章では、実証的分析の結果に基づいて、本論文が扱った農業生産資産の直接移転政策が取り組むべき改善点、同政策を補完する周辺政策の提言、今後の研究課題を明示している。

本論文の第 4 章は学術誌 *Asian Journal of Agriculture and Rural Development* に、第 5 章及び第 6 章の一部は学会誌 *Journal of Agricultural Development Studies* に掲載されている。

論文審査の結果の要旨

2. 本論文の評価

本論文は、以下の点において、貧困研究における知見の発掘、農業経済学における蓄積された知見の再検証という学術的貢献として評価できる。

- ① 従来の非常に精緻な概念に基づく装置に比べて、地域性が反映できる住民の視点で貧困を測る簡便な枠組みを提起した。
- ② 従来の静的な接近や時点比較の方法論的限界を克服し、家族ライフサイクルという節を持った長い時間軸に沿って、貧困発現の動的変容の固有性を明らかにした。
- ③ 貧困の罨を克服する鍵が「更なる資産蓄積」に繋がる投資行動であることを実証し、技術の普及を主導する農業普及事業に対して、普及員および農民に関係する人材育成の具体的な方向性を提示した。

以上のように、設定した研究目的を十分に達成し、博士論文として評価できるが、以下のような若干の問題点も含んでいる。

- ① 認識という主観的尺度で捉えた貧困は、客観的事実としての貧困にどの程度まで接近できているか。
- ② 貧困下位層に起こっている貧困軽減の立体構造的説明が残されている。
- ③ 家族ライフサイクルの異なる段階にある世帯の貧困軽減に向けた戦略は分析されているが、「貧困の深さ」が戦略の選択にどの程度影響しているかという課題が残されている。
- ④ 貧困軽減の論理の深みという点で、資産蓄積、具体的な貧困の罨、世帯における配偶者の位置づけ（貧困認識の性差）と関連付けた考察が不十分である。

これらは、今後の研究の発展のための課題であり、本論文の博士論文としての価値を損なうものではないと判断された。

3. 評価の結果と判定

以上の評価に基づき、審査委員一同、本論文を博士（国際開発学）の学位を授与するに値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。